



The Pilgrim's Progress 第二部：
その続編としての意味について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009950

The Pilgrim's Progress 第二部

—その続編としての意味について

近藤直樹

滅亡すべく運命づけられた町 the City of Destruction に住んでいた Graceless は、「助かるためにはどうすればよいのか」という生存にかかわる根本的な悩みに対する答えとして、巡礼の旅に出かけることを決心し、Christian という新たな名前になり、長い道のりの果てに天上の都に迎え入れられた。しかし、それは滅亡することになっている故郷に妻子を残したままの旅であった。あとに残された彼の妻子は一体どうなったのであろうか。このことは、誰にもましてクリスチャン自身が最も心配しているだろうことがらである。クリスチャンの懇願するような説得にもかかわらず妻と子供たちが耳を借さなかったために、彼は一人で出発せざるを得なかったわけであるが、事情はそうであるにしても、彼が妻子を捨てたという事実は消えない。この事実はクリスチャンの心に重くのしかかるが、同時に、筆者のバニヤンにとっても放ってはおけない問題である。バニヤンは、¹ 天上に受け入れられるクリスチャンを羨望の念を持って見送り、巡礼者としての彼の行動を範例として提示しているわけだから、妻子を捨てたということをも含めて彼の行動を是認しているわけである。クリスチャンは、妻子をも捨てよというイエスの教えに忠実に従っているだけだと言えばそれまでだが、そしてバニヤンはその行為を是認しているわけだが、それでも、その結果彼の妻子が不幸な結末になったのであれば、それはクリスチャンの汚点として残るだろう。

1 作者のバニヤンと作中人物の「私」が完全に同一人物であるかと言えば、決してそうではないだろうし、おそらくいかなる文学作品においてもそんなことはないだろうが、バニヤンが説教者としての立場を貫いていること考えると、作品中の「私」は限りなく作者バニヤンに近づくことが求められるわけであるから、「私」=バニヤンと一応みなおしておきたい。

クリスチャンが範例である以上、その疑惑はとり除かれなければならない。物語の性格上、クリスチャンと同様に彼の妻子もまた天上の都に迎え入れられたということを示す必要があるのだ。また、「家族は第二の自己である」と Mr Great-heart が言う通り、自分と同じように妻子が天上に迎え入れられたなら、それはクリスチャンにとっても大きな喜びとなるであろう。

... since relations are our second self, though that state will be dissolved there [in the Celestial City], yet why may it not be rationally concluded that we shall be more glad to see them there than to see they are wanting? (p. 351)

クリスチャンはこの喜びを得る価値のある人物であるとバニヤンは考えており、読者もまたそのように感じることを彼は期待している。だから、バニヤンは Valiant-for-Truth に、“How joyful will he [Christian] be when he shall see them [his wife and sons] that would not go with him, yet to enter after him in at the Gates into the City?” (p. 351) と言わせているのである。クリスチャンのためにも彼の妻子の後日譚は必要なのである。

だとしても、その後日譚はエピローグという形で述べられるだけで十分であるかもしれない。だが、バニヤンはそうしたエピローグを第一部に付与しなかった。そしてバニヤンは、新たな独立した物語として、第二部という形で、その後日譚を第一部の6年後（1684年）に出版している。² 続編の出版をバニヤンが初めから意図していたにせよ、していなかったにせよ、そうすることの必然性はどこにあるのだろうか。なぜ同じ巡礼の道のりを再び物語らなければならなかったのか。独立した作品としての *The Pilgrim's*

2 Interpreter の館で Christiana は、「数年前」立ち寄った巡礼者の妻であると自己紹介しており、第一部出版と第二部出版の6年という間隔は、クリスチャンとクリスチアーナが巡礼に出発した時間差に相当するようになっている。

Progress 第二部について、この小論で考えてみたい。

I

第一部と同じように第二部もまた、夢の中で見た物語という枠組を継承しているが、今回は夢の中で出会った Mr Sagacity という人物がバニヤンにクリスチャンの妻クリスチアーナと4人の子供たちについての話を語って聞かせるという構図になっている。Mr Sagacity はバニヤンにこう申し出る。

... I can give you an account of the matter [Christiana and her sons] ,for I was upon the spot at the instant,and was throughly acquainted with the whole affair.

... I will give you an account of the whole of the matter.³

ここから明らかになるのは、Mr Sagacity がクリスチアーナと彼女の子供たちのその後のことをすべて知っているということであり、彼女たちの巡礼の旅はこの時点で既に終わっているということである。そして、Mr Sagacity が彼女のことをクリスチアーナという名前と呼ぶ時、⁴ 彼女の夫の名前が Graceless からクリスチャンになった時に彼の未来が決定されたのと同じように、クリスチアーナも天上の都に受け入れられる定めであることが明瞭に示され、しかも彼女の旅はもう終わっているのだから彼女は今は天国にいる、ということを読者は物語が始まる前からあらかじめ知ることになる。物語とは厳密に言えばすべて過去のことであるが、Mr Sagacity が語るのはすべ

3 *The Pilgrim's Progress* (Penguin Books, ed. Roger Sharrock), p. 222. この作品の第一部、第二部からの引用はすべてこの版により、以下本文中にページ数を付与する。

4 This Christiana (for that was her name from the day that she with her children betook themselves to a pilgrim's life), ... (p. 222)

てのことが完結した過去のことである。今から語られようとしていることは既に終わっているのだ。その完結した過去の物語にバニヤンは耳を傾ける。語り手ではなく聞き手となり、バニヤンは読者と同じ立場に自らを置くことになる。Mr Sagacity の語るクリスチアーナの物語が聞くに値するものであることを、関心を持って傾聴すべきものであることを、バニヤンは身をもって率先して示そうとしているのかもしれない。第一部においても第二部においても物語は夢の中で進行するのであるが、バニヤンの立場が語り手から聞き手へと移行しているということは、巡礼に関する夢の啓示を受ける人物はバニヤンだけに限られるわけではないということをも示唆するだろうが、この点についてはまた後に触れたい。

語り手から聞き手への立場の移行は興味深いのだが、しかしそれはほんの少しの間しか続かない。突然こう語られるのである。

And now Mr Sagacity left me to dream out my dream myself.
Wherefore methought I saw Christiana, and Mercy and the boys
go all of them up to the Gate. (p. 234)

ここでは Mr Sagacity は姿を消し、以降あらわれることはない。そして、既に終わってしまっているクリスチアーナたちの巡礼物語をバニヤンが夢に見ることになる。これはどういうことであろうか。新たな構図で第二部を始めながら、急に第一部の構図に戻るのはなぜなのだろうか。バニヤンの説教者としての本性——カルヴィニストとなって以後の本性——が表に出てきて、聞き手(=聴衆)という受動的な立場よりも語り手(=説教者)という能動的な立場に戻ろうとしたのであろうか。確かに、聞き手よりは語り手の方が能動的ではあるけれども、語り手として語るべき夢は、作り出すものではなく与えられるものである。クリスチアーナの巡礼物語を Mr Sagacity から与えられようと、夢という啓示によって天から与えられようと、与えられるものであるという点に関してはそこには違いはない。Mr Sagacity の話を夢に

見るというのも天の啓示に他ならないのであるから、そこに質的な違いはないのである。違いがあるのは、それが間接的か直接的かという点である。バニヤン自身が直接「自分自身で夢を見るように Mr Sagacity は去った」のであるから、直接見ることが大切であるとバニヤンは告げられているわけである。そして、夢の中でクリスチアーナたちのことを見る者がバニヤンである以上、彼がそれを語らなければならない。自分で直接夢見、それを語るという行為の重要性を示唆しつつ、この後バニヤンは既に終わっていることを夢に見、語り続けていくのである。

この作品の構図にとって夢は重要な要素であり、語り手のバニヤンにとっても夢見ることが重要であるのと同じように、夢の中の物語の主人公クリスチアーナにも夢は大切な役割を果たす。夢の中で、悪魔の語らいと天上の都にいる夫の姿という対極的なものを見たことが、クリスチアーナを巡礼の旅へと促す大きな要因となっているのである。また、クリスチアーナにつき従う Mercy にとっても同様のことが言える。Mr Watchful (the porter) の館で彼女は自分が天上にいる夢を見て、その夢が実現されるという希望をいだくようになるのである。そして、この夢の啓示には次のようなクリスチアーナの注釈が続く。

God speaks once, yea twice, yet man perceiveth it not. In a dream, in a vision of the night, when deep sleep falleth upon men, in slumbering upon the bed. We need not, when a-bed, lie awake to talk with God; he can visit us while we sleep, and cause us then to hear his voice. Our heart oft times wakes when we sleep, and God can speak to that, either by words, by proverbs, by signs, and similitudes, as well as if one was awake. (p. 273)

神が二度語るのなら、バニヤンは二度夢を見、二度語らなければならない。啓示を受ける説教者として二度語らなければならない。第一部と第二部と。

II

クリスチアーナは夫のクリスチャンと同じ道のりを同じ巡礼として辿るのであるから、第一部と第二部の物語がパラレルになるのは必然的であるが、まず注目されるのは、彼らがまず出合う人物設定が類似しているということである。クリスチャンを巡礼に促す人物として 'parchment' を持った Evangelist が天から遣わされるように、クリスチアーナを巡礼へと促す人物として 'letter' を持った Secret が天から遣わされるのは、彼らが「選ばれた者」であることを示そうとするバニヤンの教義に由来する人物造形であるから当然納得されうることであるにしても、クリスチアーナが出発の時家に迎える Timorous と Mercy は、クリスチャンがまず出合う Obstinate と Pliable にきわめて類似しているのである。Obstinate と Timorous はともに巡礼を思いとどまらせようと説得するが、それが聞き入れられないので罵倒の言葉を浴びせて立ち去るのに対し、Pliable と Mercy は巡礼と一緒に歩いていくことになる。二人の人物がやってきて、そのうち一人が去りもう一人が巡礼に加わる、という第一部と第二部の構図の一致は、第二部の物語が第一部の物語と同じように進行するだろうということを読者に予想させる。Pliable が最初の関門である 'the Slouth of Despond' で早くも脱げ出したように、Mercy もそこで挫折することになるのではないかと読者は予想することになる。なぜなら、彼女には Secret のような人物があらわれて巡礼に出るようにと促されたわけではないし、彼女自身も強固な意志でクリスチアーナについて行こうとしたわけでもないからである。その動機は次のように説明されている。

First, her bowels yearned over Christiana; so she said within herself, 'If my neighbour will needs be gone, I will go a little way with her, and help her.' Secondly, her bowels yearned over her own soul . . . she said within herself again, 'I will yet here more talk

with this Christiana, and if I find truth and life in what she shall say, myself with my heart shall also go with her.' (p. 229)

この動機の説明からみれば、巡礼に旅立つことに関してクリスチャンやクリスチーナが悩まされたような心の葛藤がマーシーにはない。Pliable が、'I intended to go along with this good man [Christian], and to cast in my lot with him' (p. 43) と言ってクリスチャンと行動を共にしようとしたのとほとんど同じように、マーシーもクリスチーナに「少しついていこう」とただけである。マーシー（寛容）という名前から判断すると、善悪二元論のバニヤンの世界では彼女は善良な救われるべき人間の側に属すると考えられるのだが、第一部との構造の類似と彼女の動機が相俟って、読者は Pliable と同じことになるであろう彼女の未来を予想する。しかし、the Slough of Despond で脱げ出した Pliable と違って、マーシーはその関門を無事通り抜ける。読者の予想は裏切られるのである。そして、そこを通り抜けたにしてもマーシーはいずれ脱落するであろう、という予想も裏切られ続ける。

マーシーが最後まで脱落しないことは、彼女は脱落することになるだろうという読者の予想を最後まで引っ張り続ける一種のサスペンスである。これは、すべてのことが予想通りに進行していく第一部と決定的に異なる点である。第一部はクリスチャンに焦点が合わされ彼に物語が収斂していくのに対し、第二部は多くの巡礼たちに物語が拡散しエピソードの羅列になりかねない構造なのだが、それを一つの物語として統一しているバックボーンがこのサスペンスである。マーシーはクリスチーナの長男 Matthew と結婚することになるという事実が示すように、マーシーはクリスチーナの身内となって彼女と同じレベルの巡礼者になるのであり、単なる同行者という役割以上のものを彼女はこの作品において担わされているのである。

このマーシーを筆頭として、天上の都に受け入れられることを読者が確信できかねる巡礼たちが次々とクリスチーナの一行に加わっていく。クリス

チャンの同行者が Faithful と Hopeful という「選ばれた者」であることが確信できる人物だけであり、そのうちの一人 Faithful でさえもが巡礼の途中で殺されてしまったことを考えると、弱点を持った人物たちもクリスチアーナの同行者となり天上に迎られる第二部では、教義の面でパニヤンはより寛容になっているように思われる。Mr Ready-to-halt, Mr Feeble-mind, Mr Despondency とその娘 Much-afraid などは、名前から判断すれば天上に迎え入れられることが疑わしい者たちであるが、彼らは Faithful でさえ遣り遂げられなかった巡礼の旅を終え、クリスチアーナと同じように作品の末尾で昇天するのである。彼らはその価値があるとパニヤンは認めているのであり、第一部と比べて寛容である作者の姿勢の象徴として Mercy（寛容）が読者の予想を裏切り続けながら作品全体の意図を体現している、とは考えられないであろうか。

この第二部は救いの物語である。物語の結末で多くの者たちがそれぞれ天に昇る場面が長々と列挙されているのも、これが寛大な救いの物語であることを示すためである。弱き者——肉体的に弱い者であろうと精神的に弱い者であろうと——は救われなければならない。彼らは手を差しのべられ、守られ、天に迎え入れられなければならない。主人公クリスチアーナもまたその弱き者の一人である。彼女たちを助け導く Mr Great-heart は、その名をパニヤンの寛容な心の大きさに負っていると考えられよう。彼は巡礼たちを先導して旅を続けていくのだが、弱き巡礼者を守るとは裏を返せば悪しき者を挫くことである。だから、この第二部は殺りくの物語でもある。Grim (Bloody-man), Maul, Slay-good, Giant Despair といった巡礼の敵対者たちが Mr Great-heart に殺される場面が執拗に描かれているのは、救いと殺りくの表裏の関係を示そうとしているのではないだろうか。

救いと殺りくの物語としてこの作品は進行するのだが、次々に弱き巡礼者がクリスチアーナの一行に加わり、次々にその敵対者たちが殺されるという構図は、起伏のある物語というよりルポルタージュに近い。巡礼者たちがそれぞれの物語を語る、いわば物語内物語がその傾向を強めている。巡礼者た

ちはそれぞれの来歴の物語という手みやげを携えてクリスチアーナの一行に加わるのだが、それは物語というよりもむしろ事実の報告と言った方が適切である。だから、この第二部は物語から離れてルポルタージュに近づく。この形式は、後に近代小説の祖となるダニエル・デフォーが H. という架空の人物を創造して、ロンドンを襲ったペストに関する歴史的事実を報告した作品 *A Journal of the Plague Year* (1722 年) に至って一つの典型をみることになる。*The Pilgrim's Progress* 第二部は『ペスト』における H. のような一人の人物の報告ではなく、多くの登場人物たちの報告が寄せ集められているのだが、この作品全体の構図を考えてみるならば、それは夢見る人バニヤンという一人の人間の報告である。H. にとってペストが事実であったのと同じように、バニヤンにとってもその夢は事実である。事実の報告という作品創造の動機は、バニヤンからデフォーへ、そして近代リアリズム小説へとつながる道なのだ。

しかし、バニヤンにとっては、事実の報告という形式は個別的な一個の文学作品を創造するために用いられたものというよりは、新たな別の作品を生むための契機を提供していると考えられる。つまり、作品の完結性ではなく継続性ということ。一回限りの事実が記述されることによって閉じられるのではなく、一つの事実がまた別の事実を生むということ。作品が作品を生むということ。この点にこそ *The Pilgrim's Progress* 第二部の意味があると思うのだが、そのことを次の章で述べてみたい。

III

クリスチャンの妻クリスチアーナは天上の都に迎え入れられ、彼女と最初から巡礼の旅を続けてきた 4 人の子供たちとマーシー（今や長兄 Matthew の妻となった）は天上に迎え入れられたとは語られないものの、それは時間の問題で確実なことという理解のもとに *The Pilgrim's Progress* 第二部は終わる。こうして、クリスチャン一家は天上で全員が再び一緒になるという

喜びを得ることが示されるのだが、今度はマーシーが家族と別れ別れになるという結果になってしまった。マーシーは家族と一緒に巡礼に出かけるように説得することなく——この点がクリスチャンの場合と異なるが——衝動的にクリスチアーナについて行こうとしたわけであるが、それでもやはり家族のことは気にしていた。Interpreterに旅立ちのことを尋ねられたマーシーは、こう答えているのである。

... I came away with a heavy heart, not for that I was unwilling to come away; but for that so many of my relations were left behind.
(p. 255)

これに対して Interpreter はマーシーを次のように慰める。

Thy setting out is good, for thou hast given credit to the truth.
Thou are a Ruth, who did for the love that she bore to Naomi, and to the Lord her God, leave father and mother The Lord recompense thy work, and a full reward be given thee of the Lord God of Israel, under whose wings thou are come to trust. (p. 255)

マーシーが巡礼に出かける動機にはやや不純な面があるとはいえ、その名に恥じない慈悲深い行動——あまりに過剰すぎて求婚者の Mr Brisk を遠ざけてしまうことにもなったような行動——をしながら旅を続けたのであり、その正当な酬いとして彼女は天上に迎え入れられることになったのである。とすると、滅亡の町にとどまっている彼女の家族は、クリスチャンが巡礼に出かけた後の彼の妻子と同じ立場に置かれていることになる。マーシーの行動が是認されて天上に迎え入れられることになった以上、クリスチャンの妻子に対する気がかりがこの第二部によって解消されたように、マーシーの気がかりを解消すべく彼女の家族の巡礼物語が語られなければならないことに

なるだろう。クリスチャンと巡礼の道のりは同じながらもクリスチアーナたちの旅が新たな物語となったように、マーシーの家族の旅も新たな物語となるであろう。また、クリスチアーナたちの巡礼に途中で加わる Mr Valiant-for-Truth は、クリスチャンが巡礼に出かけるのを思いとどまらせようとする妻の説得を振り切ったように、両親の説得を振り切って旅に出かけたわけであるが、クリスチャンの妻子の後日譚が語られるように彼の両親の後日譚も語られなければならないであろう。そしてまた同様に、一行が the Enchanted Ground で出合った Mr Stand-fast は、クリスチャンと同じように妻子を後に残したまま巡礼に出たわけであるが、彼は妻子のことを巡礼の先導者である Mr Great-heart にたのんでおり (p. 371)、クリスチアーナと同じ物語が再び生まれることになるであろう。

こうして巡礼の旅の物語はどんどん増殖し継続していく。それは終わることではない。クリスチアーナの物語が続編として新たに語られていることは、巡礼の旅の物語が一回限りのものではなく、それが次々に継続していくものであることを表わしている。クリスチャンの巡礼物語は第一部で結末に至ったが、第一部だけですべてが語り尽くされたわけではない。パニヤンは、第一部での「著者の弁明」に相当する、第二部の冒頭に付された 'THE AUTHOR'S WAY OF SENDING FORTH HIS SECOND PART OF THE PILGRIM' という文章の中で書いている。

. . . what my first pilgrim left concealed,
Thou my brave second pilgrim hast revealed ;
What Christian left locked up and went his way,
Sweet Christiana opens with her keys. (p. 215)

そして明白なことに、*The Pilgrim's Progress* 第二部によってすべてが語り尽くされるということはないし、そんなことは不可能である。新たな巡礼物語が語り続けられるのだ。パニヤンは再び語ることになるかもしれない――

実際にはそうはならなかったが——という可能性を残しながら、この第二部は終わる。

Shall it be my lot to go that way again. I may give those that desire it an account of what I here am silent about; mean time I bid my reader *Adieu*. (p. 373)

この結びの言葉で述べられている「あの道を再び行く」とは、夢の中でまた行くのだろうか、それとも次は巡礼として実際に行くのだろうか。文脈からすると前者だが、後者の可能性も含まれている。バニヤンは、Mr Greatheartが持っている地図がないので、巡礼の道に迷った時困まるだろうと心配していたのであるから。彼は読者を巡礼の旅へと促しているように、自分自身をも促しているのであろう。そして、将来バニヤンの巡礼の旅が行われることになるとしたら、それを誰かが夢の中で見て物語ることになるかもしれない。巡礼の旅の物語は語り続けられていくのだ。その可能性を暗示しながら *The Pilgrim's Progress* 第二部は終わるのである。先に述べたように、この第二部においてはバニヤンの立場が最初は聞き手になっていたことが、夢の啓示を受ける人物がバニヤンだけに限らないことを示すとしたら、別の人物がバニヤンの巡礼を夢に見て語るという可能性があることをそれは示してもいるだろう。そして、バニヤンの立場が聞き手から語り手へと移行することは、聞き手は語り手とならなければならないということを示すのだろう。そうすることによって物語は継続していく。

Mr Sagacity という語り手からバニヤンという語り手への移行は、夢の啓示の継続性を意味する。Mr Sagacity の知っていることをバニヤンが夢に見たということは、バニヤンが夢に見て知っていることを次は別の誰かが夢に見るだろうということを意味するのである。こうして一つの夢が、本が読まれるように、伝えられていく。と同時に、その一つの夢は別の夢を生む。一つの物語は別の物語を生み出す。クリスチャンの物語がクリスチアーナの

物語を生み出し、クリスチアーナの物語がやがてマーシーの家族の物語を生み出すであろうように。夢の啓示＝物語のこの二重の継続性。それを示すことに、クリスチアーナの物語が続編という新たな作品の形で語られる意味がある。

もっとも、その意味は一つの文学作品としての意義とは別物であるが、一つの作品の主人公が結末を迎えてもそれでその物語が語り尽くされて完結したことにはならないこと、一つの作品は別の新たな作品の契機となること、そうした文学の継続性を示すことは、一つの文学作品としての意義を離れて大きな文学的意義を持つだろう、と思う。